

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

人生は自分のためのことと、他人（ひと）のためのこととの間にあって、交錯して、微妙に悲喜交々の綾を織りなしている。おもしろいといえばおもしろく、苦しいといえば苦しい。古来この綾について、いろいろと先人は研究し、著述をし、言い残してきた。良書を読むと、そうしたことが分かるようになり、折にふれ、時にのぞんで自分の生活の支えとなる。

本は真理の索引（インデックス）とも言われる。本を読むと、いろいろのことが分かるけれども、いろいろな人の苦勞のあと、その結果などが真理としてその中に、著されていく。くだらない例は、くだらないものとして、その中に出てくる。その判断もまた必要となる。しかし良書は、そのまま為になる。その内容の批判もまた為になる。頭脳の働きのためにもよい。

頭脳の働きや知覚がにぶることをボケるというが、もっと広い意味では、自分のゆき方、身の処し方、今日、明日のやり方などがはつきりせずボーッとなっていることなども、ボケのひとつである。

寝ころがってテレビを見るのも悪いといえないが、安易に眼に入ってくるものには、必ずしも強くは残らないところがある。やはり一字一字を追ってまじめに読む努力



## 人が見ていない 場所でこそ…

丸山竹秋

は、頭をボケさせないし、とくにそこから得られた真理は、人生ボケを少なくするのに役立つ。人生には迷いが多い。それが人生ボケである。どうしてよいかわからないことは、しょつ中である。そうしたものに光をあたえる道はいろいろとあるが、然るべき良書を自分で読んだり、何人かと読みあつて意見を交換したりするうちに、ハッと心にひらめくものを与えられることが多い。これを学習という。生涯学習の中では、こうした良書の学習は、個人でも多人数でも効果的である。

良書を読みあうということもひとつの実践である。もしその実践によって生活の大道を学び、それが実践することに役立つならば、それこそまさに学習実践であり、実践学習である。識者の講演を聞くのもよいが、たえずそのチャンスがあるとは限らない。テレビでもそうした話がいつでもあるとは限らない。本は外でも読めるし、その文字はパッと消えてしまうものではない。

毎日が忙しくて、読書の暇などないという人は実際にいる。一字一字読むのに苦勞するという人もいる。しかし何も学者や普通の識（し）りや理屈屋になるのではない。日常の生活の指針となり、実践の手引となるものを読書から得ようというのである。

良書は選び求めておけば、暇をつくって、いつでも読むことができる。文字という人類の知恵によってできた書物は文化生活のパロメーターでもある。

『丸山竹秋選集』より